

## タイでの10日間滞在記

ー卒業論文と天秤にかけて得たものー

三重大学生物資源学部森林生物循環学研究室

松下知世

今回私は、チェンマイ大学の農業祭の参加とタイでのブナ科樹木萎凋病の調査を目的とし2009年11月26日から12月5日にかけて10日間タイに滞在しました。ここでは、その際に学んだことを書かせていただきます。滞在中、実際に本病の調査は行ったのは3日行いました。その調査の処理に2日、それ以外にはタイの研究室の見学やタンジュリン農園の見学やマーケット視察を行ったのが主な行程となります。

私が海外に赴くは、人生で2回目でした。はじめての海外は、日本との違いにただただ戸惑い、怖くも感じたため、海外に対するイメージはあまり良いものではありませんでした。今回の滞在は、卒業論文作成中ともあり、はじめは少々気が重かったほどです。

それでも飛行機を乗り継ぎ空港から出れば、温かい風が吹き込みタイに到着したことを実感しました。出迎えには昨年三重大学を訪れたタイの先生方がいました。その先生が、昨年ともに伊勢に行った私を覚えていただいたことで、暗かった気分は明るくなりました。その日は、そのままホテルに向かい、夕食をすませ、早めに就寝しました。

目が覚めてもタイにいることは夢ではなく、朝を向かえました。そこで、改めてタイの風景を眺めると日本とはまるで異なります。以前ならばその違いに、不安を感じました。しかし、今は生活や植物の形態がまったく異なることに対し、疑問をもち、好奇心が強くなりました。不安よりも日本にはないことを知りたいと思え、タイの滞在に対し前向きになることができました。この心境の変化は、私が撮影した写真



タイで撮影した植物(一部)



チェンマイ大学の一室

Mie University Office

の多くを植物が占めていたことがその一端を表していたように思います。

滞在時の拠点は、チェンマイ大学内の一室に設けられた **Mie University Office** でした。部屋は壁の上側は窓となっており、開放的な印象がありました。そこで、調査で採取した虫の分別を行ったり、日本からのメールのチェックを行いました。今回の滞在では、無線 LAN への接続が悪く、パソコンを持って歩き回る姿もよく見ました。メールチェックだけに 30 分を要するのはなかなか気分がよろしくないものでした…。部屋の外には、2 組のソファセットと扇風機があり、私たち学生は主にそこで調査や視察の合間を過ごしました。そこにいると時間ができたタイの先生方が現れ、先生方のプロジェクトがどのようなものか写真データを持ってきて話(もちろん、内容は英語ですが)を伺うことも出来ました。タイの先生方の英語は、英語が苦手(特に話すことが)な私でも聞き取りやすい英語が多く、また先生方もわかりやすいように配慮いただいていることがわかるので、理解できたとともに、配慮いただいたことにとっても感謝しています。

滞在の目的の一つである農業祭の参加としては、三重大学を紹介するブースの設置を行いました。Mie University Office からは少し離れたところであり、向かうには農学部内を横断していくこととなります。農学部は、いくつかの校舎に分かれており、渡り廊下などでつながっていました。タイの気温が年間を通して温かいこともあり、校舎はどれも風通しがよさそうな



左上：ブース設置の様子、左下：花飾り  
右：ブース全体の様子

造りをしているように感じました。実際に、Office のある校舎の廊下は壁がなく、日差しも

風も通りやすいさわやかな印象を持ちました。そのような校舎を通りぬけると、ブースが展示されている広場につきます。ブースの展示箇所には、竹と布で出来た日よけと展示用の板が用意されていました(タイは、12 月は乾季のため雨よけが必要ないので、傘は日よけのみの役割で立てられていました。)私たちが到着したころには、板にはすでに花飾りが準備されていました。花飾りは研究のポスターを展示するものとしては造りが立派で、作成した方のセンスの良さと器用さを感じました。しかし、英訳した研究室の紹介ポスターは予定よりも大きく、その花飾りを一度外さなくてはいけなかったのは残念でした。それでも、おかげさまでポスターがとても立派に見えました。



上：食虫植物、下：植物の市場  
右：ブース全体の様子

展示ブースの周辺は、農業祭が行われている期間中は植物の市場になっていました。蘭や食虫植物、ジャックフルーツなどの果物などの販売があり、もし飛行機でなければ購入してみたいと思うような植物がたくさんありました。そこを眺めるだけでもタイの植物が日本と全くことなることが分かりました。特に今回、蘭に興味を湧きました。それは、見る機会が多くあったからかもしれません。農業祭の農場でも多く栽培されていましたし、その他に蘭園や蘭のコンテストを行っている会場にも行ったため、様々な蘭を見ることができました（泊まったホテルの名前も Orchid(蘭)。今回の滞在で蘭とこれほど縁ができるとは思いませんでした。) 同行した松田先生から伺った話では、蘭は蜜のある場所の大きさを食べることで特定の虫だけが蜜を吸えるようにしてあるとか、バルブが太いほど栄養を吸収しているとか…。普通の花であれば、ただきれいというだけで終わってしまうところがありますが、蘭の変わった形態は何故そのような形態をしているのだろうかと考えさせることが多く、興味深い植物であることを実感しました。



タイで撮影した蘭(一部)

この他にも興味深い植物としては、黄色いや赤の竹、街路樹となっている豆のなる木、葉の大きさが 30cm 以上あるチークなどもあり、街にただある植物も目新しく感じました。それだけに調査地の山は、じっくりと見たいと思う点も多くありました。調査地のドイ・ステップでは、虫が穿入した材の採取やその周辺の虫の採取を行いました。枯死した木の同定のため、私は、その木のどんぐりの採取等を行いました。私は、日本でどんぐりの同定を行う講義を受けたことがありますが、3cm 以上の大きさがあるどんぐりや、クリのような堅い殻を持つどんぐりも見たのはこれがはじめてでした。そのような採取したどんぐりを実際に手に取ることで、今回の滞在が本当に貴重な経験だと一人感じていました。



上：調査地で採取したどんぐり

下：調査の様子

今回の滞在で私は、少しの知識と好奇心をもって海外に行くことで自分の興味や世界観を広げられたように思います。もし、植物の形態について少しでも学んでいなければ、タイの植物が日本でありえないことなのか、珍しいことなのかも判断がつかなかったと思います。また、それが何故なのだろうと思えば、滞りを終えた後の学ぶ活力ともなり、卒論の作成を止めても行っただけの価値のある知識を得たことになるのではないかと思います。

滞在で学んだことといえば、もう一つ言葉があります。タイの先生方は、英語が出来ない私にもずっと話かけていただき、食事をするときも心遣いを感じられました。それでも最終日に、それらに対する感謝を伝える英語が上手く思い浮かばないことをとても悔しく感じました。そして、英語の勉強はおろそかにしてはいけないなとも思えました。なによりもそれほど他の国でそれほど優しい人たちと知り合えたことを感謝し、今回の滞在を今後の自分の生活の中で活かしたいと強く思える滞在でした。